

ボランティア、 自分のためにやっています

稲毛 洋子

日本赤十字社三重県支部点訳奉仕団

出会いはいつも不思議なものである。あの人に
出会わなかったら人生は違ったものになったであ
ろう——そんな思いを、誰しも一度は抱くのでは
ないだろうか。私にも15歳の時、そんな出会いが
あった。たまたま知りあったカトリックの若い男
性が、ある日私に点訳奉仕団の存在を教えてくれ
た。私は、友人と2人で電車で1時間ほど揺られ、
その点訳奉仕団まで出かけた。

そこで目にしたのは点字という文字。たった6
つの点の羅列で言葉が綴られていく不思議さに、
私はすっかり魅せられてしまった。点字を教えて
下さる先生は、全盲の男性であった。本の校正の
ために、傍らで点訳者が朗読するスピードと同じ
速さで点字を読んでいかれる先生。そのすばらし
い指先に、私の心は吸い寄せられた。それまで考
えてみることもなかった「見えないということ」
が、その時、思いっきり私の体全体に広がった。
そして、点字というものが、目の不自由な人にと
ってどんなに大切なものであるかを考えた時、そ
の本がどこにも売られていないということを知っ
た時、私は「点字の本を作ることを生涯の仕事にし
よう」と決意したのである。まだ、ライフワークと
いう言葉も、ボランティアという言葉も使われて
いなかった頃のことである。

それからは毎日、勉強の合間を縫って、点訳の
練習をした。本をつくれるようになるまでには1
年の月日を要した。それから更に1年、やっと1
冊目の本が出来上がったのである。1字1句おろ
そかにすることのできない点訳という作業は、自
己との孤独な戦いであり、誤りがあってはならな

いというプレッシャーもかなりなものである。し
かし、その1枚1枚の積み重ねが本となった時の
喜びは、何物にも替え難いほど大きい。殊に1冊
目を仕上げたあの日の感動は、25年を経た今も私
をつき動かす原動力となっている。

途中、3人の子の子育てで、長い間の中断があ
ったが、子供たちから手が離れつつある今、思う
存分点訳に打ち込めることを感謝し、点訳者の養
成にも力を注ぐ毎日である。

高校時代、「少しでも多くの友に、この喜びを」
と思って作った「点訳同好会」も、後にクラブとな
り、今も続いていると風の便りに聞く。たった1
人2人のささやかな決意が、友を呼び横へ横へと
広がっていく。そしていつの間にか大きな輪とな
って社会を支えていく。それがボランティアのあ
るべき姿なのかもしれない。

私にとって点字との出会いは、人生を開く扉で
あったように思う。誰かのために始めたはずなの
に、それが自分の目を開け、自分の知識を増やし、
いつしか自分が高められていくのを感じる。ボラ
ンティアが続けられていくのは、きっとどのボラ
ンティア活動にもそんなすばらしい魅力が潜んで
いるからであろう。長く続ければ続けるほど自分
の受ける学びは大きく、今ではもう「自分のために
やっています」としか言いようがない。

そろそろ私たちの地域でも、各ボランティアが
横につながろうという動きが出てきた。さまざま
な障害を持つ人たちが、共にノーマライゼーショ
ンをめざす日も近いことを信じ、私も及ばずなが
らその一端を担っていきたいと思う。